

第6回「泉大津市オリウム随筆賞」

【佳作】

河童のマフラー

平澤絵理子・神奈川県

「ちょっと、大変なことになった」

あわてた様子で、母から電話があった。

なんでも、母の手編みのマフラーが騒ぎになっているのだという。

母の声がさらに追いかけてきた。

「ほら、お母さん編み物するのが好きでしょ。だから、遠野から帰ってきてすぐにマフラーを編んで送ったのよ。あの駅前に行った、やせっぽちの河童たちが寒くないようにと思って。それが、あつちで大騒ぎになるなんてねえ」

とたんに、九州の両親と、東京に離れて暮らす私たち家族四人で、東北を巡る旅の最後に訪れた遠野のことがよみがえってきた。

田園風景の中に点在する曲がり家で、座敷童の話の聞いたり、木立の中の小さな淵で、河童がいるかと覗き込んだり、物語の世界にどっぷり浸かった帰り道、遠野駅の駅前広場で、私たちは河童の彫像に出会ったのだ。

それはある彫刻家を作ったという四体の河童像で、よくお土産などにあるような、愛らしいキャラクターの河童とは全く違う容貌だった。まるでジャコメッティの彫刻のように、きりきりと肉をそぎ落とされ、かわいさより恐ろしさの方が勝った、今にも動き出しそうなりアルな雰囲気の彫像だった。

その河童をしげしげと眺めていた母が「これから寒くなるのに、この子たち、こんなにやせていて裸だなんて、かわいそうね」とつぶやいていたのを、ぼんやりと思い出した。

それでマフラーを編んだのかと、私もようやく合点がいった。

母は昔から編み物が好きだった。

私はまだ子どものころ、家には編み機があつて、母はよくその編み機の前に座って何かを作っていた。それは私のセーターだったり、カーディガンだったり、ベストだったり、時にはワンピースのこともあつた。

子どもはどんどん成長するので、ほとんどワンシーズンで小さくなっていくセーターやカーディガンは、母の手によってほどかれて、いつの間にかまた毛糸の玉に戻っていた。

我が家の毛糸の洋服たちは、そうして繰返し、いろんなものに変化していった。家族だけでは飽き足らずに、近所の子どもや、友人、知人にまで、母の編んだマフラーやカーディガンは拡散していった。

ただ誰かを喜ばせたい一心で、母は編み物をしていたのだと思う。とにかく、母が何かを

編んでは、それを親しい人たちにプレゼントして、貰った人が喜ぶと、それを励みにまた編むというのが母の楽しみだった。

その母が、旅先の遠野駅前で見かけた四体の河童像のために、冬に間に合うように、せつせと色違いのマフラーを四本編んで、遠野の観光協会に送ったという。

折り返し、遠野の観光協会からお礼の連絡があり、さっそく河童たちに母の編んだマフラーを巻いたとのことだった。

それを聞いた母は、これで東北の厳しい冬でも河童たちは寒くないだろうと、喜んでいたそうだ。

やがて、遠野駅の広場を行きかう人々が、河童の像の首に巻かれた、カラフルな毛糸のマフラーに目を止めるようになった。

それと同時に、彫刻家を作った河童の像にマフラーを巻くと、作家の意図する作品性が損なわれるのではないか、という意見がちらほら出始めたらしい。

こうして、小さな遠野の町で河童のマフラー論争が始まったのだった。この論争は地元の新聞でも取り上げられて話題になった。

「あの河童は彫刻家を作った芸術作品だから、後からむやみに何かを着せたり、装飾を加えたりしてはいけない」

「いやいや、広場などにある彫刻は、村や町に祀られているお地藏さまと同じで、人の愛情を受けて服を着たり帽子をかぶったりしても、それは親しみを持たれているという証拠ではないか」

議論は賛否両論かしましいまま、なかなか決着がつかなかった。

困ってしまった遠野の人たちは、ついに河童像を作った彫刻家本人に意見を求めた。

すると彫刻家は、「自分の作品ではあるけれど、河童に思いを寄せてマフラーを編んでもらえるというのは、とてもうれしいことです。ぼくは河童たちがマフラーを巻いても、ちっとも構いませんよ」とツルの一言。

こうしてその冬、やせつぼちの河童たちは、雪の降る寒い日々を、あたたかい母のマフラーを巻いて過ごすことができたのだ。

この結末に、母もひと安心したらしい。

もしこの論争の挙句に、河童像にマフラーはいらないということになったら、母が相当がっかりするだろうと心配していた私も、ほっと胸をなでおろしたのだった。

以来、遠野駅前広場の河童たちは、寒い冬にはマフラーを巻いていることが多いと聞く。